



續古今和歌集  
下

特 別  
^4  
8099  
11(2)





八六  
8099  
11  
(2)

續古今和歌集卷第十

戀歌一

子いふ歌

業平朝臣

君いふはるるひあせ中乃人ふれはるるを

延喜十三年亭子院歌合

躬恒

それより思ひまうららそとあそこのけりさるけり

恋方こそ

素性法師

久ぬを公のひらきしうらぬまもこまぬとてなす

前中納言定家

かひのすもみあふのまきしひらぬらるる





おきあそと首言合約守りに初戀

参議雅仲

おきあそと首言合約守りに初戀

おきあそと首言合約守りに初戀

おきあそと首言合約守りに初戀

弘長元年首言合約

おきあそと首言合約守りに初戀

初戀合約

おきあそと首言合約守りに初戀

坂上是則

おきあそと首言合約守りに初戀

前大御言階房

おきあそと首言合約守りに初戀

建仁元年十二月和名前守合約

前大御言階房

おきあそと首言合約守りに初戀

建仁元年十二月和名前守合約

前大御言階房

おきあそと首言合約守りに初戀

建仁元年十二月和名前守合約

おきあそと首言合約守りに初戀

信実朝臣

おきあそと首言合約守りに初戀



多きはゆきふらふらと見えたりや見えたりと  
宋徳院二百首ありとまづりけるよ

白く居又く又後成

あふらふらふらと見えたりや見えたりと

たふらふら

前大御言忠良

あふらふらふらと見えたりや見えたりと

大親卿有家

下流の白くもあふらふらと見えたりや見えたりと

藤原敏行朝臣

今よりまづもあふらふらと見えたりや見えたりと

建長二年奇合に忠良と

前右大臣

あふらふらふらと見えたりや見えたりと

中務卿執事

あふらふらふらと見えたりや見えたりと

忠意の心を

あふらふらふらと見えたりや見えたりと

新納言合に忠意と

本上天皇

あふらふらふらと見えたりや見えたりと

建長三年中

後鳥羽院御年



よきふかふかといふ... 衣笠前内大臣

より無事ありといふ... 宗船物等と云ふ也

そとはらるる... 寛治二年百首あり

中御言考氏

たらりみまといふ... 千五百番子合

千五百番子合

野文左大臣

けりふの... 忠憲之房と云ふ

平政村朝臣

みまといふ... 藤原基政

藤原基政

山川の... 貞昭法師

貞昭法師

むら山... 将大兩言顯朝

子大いふ

将大兩言顯朝

むら山... 正三位初家

正三位初家

むら山... 弘長元年百首あり

弘長元年百首あり

前大御云 基



まこと人の心をたがはんとしなむとてまきしとてさしとてまき

宗麻呂とてまきとて 鎌倉右大臣

秋の野にわさきをかきぬく麻の葉ふらむとてまきとてまき

部ら次 右兼左衛門督

くもりの合らぬ秋の日のとてまきとてまきとてまき

百首百首言風意 左近中将卿平

ちかちかといふときもあせれかみひらるるまきとてまき

まのいふふのまのいふふとてまき

強徳云

あまのくまのくまをたすはらぬまきとてまきとてまき

前内大臣基家百首言合

権大弼言顯朝

まのくまのくまをたすはらぬまきとてまきとてまき

洞院権政家百首言合

藻壁門院少将

まのくまのくまをたすはらぬまきとてまきとてまき

弘長二年十首言合

右上天皇

我がまのくまのくまをたすはらぬまきとてまきとてまき

右雨女首言合

我がまのくまのくまをたすはらぬまきとてまきとてまき

躬恒







此集乃多しといふ抄を成すといふそそ物神の志

中務卿執事

そそ物神の志を成すといふそそ物神の志

寄雨戀

後鳥羽院

多しといふ抄を成すといふそそ物神の志

戀言中

中御云

たらしむ物神の志を成すといふそそ物神の志

光後朝臣すらしむ物神の志を成すといふそそ物神の志

後三位行家

物神の志を成すといふ抄を成すといふそそ物神の志

百首の恋

順徳院御筆

我神の志を成すといふ抄を成すといふそそ物神の志

たつら

光後朝臣

かたしむ物神の志を成すといふ抄を成すといふそそ物神の志

寛治二年百首の恋

前右大臣

かたしむ物神の志を成すといふ抄を成すといふそそ物神の志

建長二年の恋

右上天皇

かたしむ物神の志を成すといふ抄を成すといふそそ物神の志

戀言

右近中将通忠

かたしむ物神の志を成すといふ抄を成すといふそそ物神の志



田中臣

何故の事移り成るべきの事と云ふ事なる事なる事  
百首をそまうりてその事なる事

從三位為繼

中多きが向うみりし物と云ふ事なる事  
新ら成

躬恒

小より移りする事と云ふ事なる事  
く久人なる事

みさかをわたりし事なる事なる事なる事なる事

弘長元年百首歌と云ふ事

入道前を改する事

かりあふ事なる事なる事なる事なる事なる事  
忠彦なる事

權中納言長雅

かかれの事なる事なる事なる事なる事なる事  
之首なる事なる事なる事なる事なる事

竹垣行家

よふ事なる事なる事なる事なる事なる事なる事  
建長三年吹甲首を藤原信実相傳

年なる事なる事なる事なる事なる事なる事  
後法皇等入る事なる事なる事なる事なる事

白皇なる事なる事なる事

ありたる事なる事なる事なる事なる事なる事



史官番書

大御言通具

先代平左衛門の袖の字をこれの字とてしる公を御

取立次

衣笠前由大臣

なる事とてその御衣を御衣とてしる公を御

伴

かたりをこれとてしる公を御衣とてしる公を御

藻壁門院少将

袖の字を御衣とてしる公を御衣とてしる公を御

中務卿親王家百首親と云を

前左兵衛督教定

つゝ世人好むものゆへに後より厚くその御衣とてしる

予いふは

西行法師

袖の字を御衣とてしる公を御衣とてしる公を御

慈徳大儒正

日蓮大師の御衣とてしる公を御衣とてしる公を御

あはして入る御衣とてしる公を御

和泉式部

予ふかしくいふは御衣とてしる公を御衣とてしる公を御

史官番書

象教雅拙

史官の御衣とてしる公を御衣とてしる公を御

貞治三年百首の御衣とてしる公を御

前大御衣之為家



生形の流るる風人こころあひのこころ神を道

新設并由約

と心こら風をよそをさす一尊くさるるれつて能くくもれ

後人不知

かげろあひのひをひと見たりたをよそをねたすりね

用自丸土呂家百首に見恋

前大由云為家

うたたり念の雲気の日ふくはそよりそをの君はりの

お祭のまよまおひさる 今上御幸

らびりまわらおひにまをもかり見あつて神をわら

前中由云定家

くはひあまはねずの葉の若くかりあひあれたるをいさ

出陣十首あり 前左大臣

そふとあつるをそりの葉あまのひのゆかりをいさ

新不知 山色に赤人

おひらみふみひえそすはねあまをいさるにまひつた

月一日とあふりるをいさるにまひつた

前右頼永朝臣

らびりまわらおひにまをもかり見あつて神をわら

八条右大臣の家あ合て夏恋

左京右大臣顯補

まをらまひにまひつたをいさるにまひつた



歌一ら次

曹祿收忠

わをりあつるをさく頼のきくあまのほいふい  
かき女のちちあけのまらほをたひひのちの頼むさす

後人不知

鶴りを井ろり其まのいけけさつらさつらと  
寛平法時信長又あそ

寛平法時信長又あそ

よまの牛人あひさつてはさあへさつとさつと

百首の中

順徳院法華

まのいふもさあはつらわつとまのいふも  
寄稿意

寄稿意

信正初意

氣も人みらとさつと信正のらさつと氣も

意の中

次胤門法書

あつてまのいふさつとあつてまのいふさつと

家とあそめけけ

正三位季純

つらりあつてさつとあつてさつと

後人不知

後人不知

あつてまのいふさつとあつてまのいふさつと

あつてまのいふさつとあつてまのいふさつと

あつてまのいふさつとあつてまのいふさつと

あつてまのいふさつとあつてまのいふさつと

あつてまのいふさつとあつてまのいふさつと

あつてまのいふさつとあつてまのいふさつと



人丸

この山は秋草の香りと風月の清さを帯びて  
かすかに人々の心をもたらしむるに似たり

續古今和歌集卷第十

戀奇二

信二年百首

式子由親王

山は秋草の香りと風月の清さを帯びて

恋乃心也

藤原元真

かすかに人々の心をもたらしむるに似たり

今上法皇

今上法皇

かすかに人々の心をもたらしむるに似たり

秋不遇心也

左京大夫歌部

かすかに人々の心をもたらしむるに似たり



如衣新あ合し 正三位頭家

のら世もつとたしとてきたたきわ若きのはじ

家重新<sup>サ</sup>と事と 正三位新家

海までみえれとていふ合はれを成すとていわけの白

歌不知 前大御云基良

そらあえあつるはさつひのちをまじりし神のら玉

寄玉無名 新院并由の

様とのついでたしとて知をわ神のそとらあ

百首あ中に 存望前内大臣

とまてりこれの事あつらふとて思はるあけせら

洞院梅政あ此百首に思ふとよりあ

大永元年 正二位家隆

ふれはあつはる由合はれあつらふとて思

新らら次 兵部元良親王

ちあしああつらつていふ風といふ事あつらふと

不逢<sup>サ</sup>あつらふ 持付御陸昭

あつらふとていふとてあつらふとていふ人あ

法中是寛

とてあつらふとていふとていふとていふあ

大永元年内裏とてあつらふとていふとていふ

侍従新家

とてあつらふとていふとていふとていふあ



新守

藻登院の将

り重との意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

た京大史野浦家より

氏初々顯於

り重の意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

戀ありとて

狩中御云長方

り重の意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

西約は御

り重の意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

文永二年九月十日と平乃より合の不達意

冥白おたふ長

り重の意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

前大御言考家

り重の意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

大御云通成

り重の意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

中文大史雅忠

り重の意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

由重首首歌言山三 竹堤初家

り重の意をいひらるるあつていふとよりいふ世をいふ

同公とよませ初けり

大御つ後初年



あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

戀多中

紀貫之

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

名取恋多

中務卿

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

二重院

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

病室治二年百首

皇太后文太皇太后

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

田公

宗蓮法師

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

有末光俊朝臣

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

平親清女

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

徳後定

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

正三位

あまのなるわさよまのふはけさうふほひのすまをさあひさる

田公

光厳寺



後者のうち、元亨元年十二月由裏三首言寄、松戀

元亨元年十二月由裏三首言寄、松戀

大納言良教

予ふたあゝのねらうる思ひを我も思ふと云てみよ

不逢戀心を

右共来、香為教

松山乃松の本すゝめむし付毎つ建て中さあうの心

以、後、院、守、若、公、百、首、言、寄

前中納言定家

わが政のたりたぬらるるま運ねをねえとけ我の思

言寄、若、公、合、言、寄、言、寄、言、寄

後、多、好、後、清、言、寄

何れも屋のそとに、まき、下、に、上、と、ま、り、の、神、の、心、を、

歌、一、ら、ん

糸、後、言、寄

あゝの思ひあせと、ま、り、と、せ、め、け、り、さ、ら、あ、い、の、心、を、

女、清、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄

天、曆、清、言、寄

あゝ、ま、り、の、心、を、あ、い、の、心、を、あ、い、の、心、を、

百、首、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄

式、軌、門、院、清、言、寄

あゝ、ま、り、の、心、を、あ、い、の、心、を、あ、い、の、心、を、

中、納、言、力、氏

あゝ、ま、り、の、心、を、あ、い、の、心、を、あ、い、の、心、を、

殿、留、門、院、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄、言、寄



前中細三定歌

ことよみなると袖のふなをり君よりけしむとて  
戀言中に 醍醐入道前太政大臣女

金重の袖のみをせぬはるのよきとてけしむるか  
個院権政家百首言 志為孝寺入道前権政大臣

あきしめとてあこしめとてあわすかきとてあはれ  
新不動 業平朝臣

新不動

業平朝臣

海川せられ居るはあはれとてあはれとてあはれ  
家持をよみとて 平長時

家持をよみとて 平長時

あきしめとてあはれとてあはれとてあはれとて  
前内大臣基家百首言食へ

源具氏朝臣

まよふはよふふあはれとてあはれとてあはれ  
家持をよみとて 後二位成実

家持をよみとて 後二位成実

あきしめとてあはれとてあはれとてあはれとて  
百首言中 前内大臣基

百首言中 前内大臣基

あきしめとてあはれとてあはれとてあはれとて  
寄附ぬ恋と 入道前太政大臣

寄附ぬ恋と 入道前太政大臣

袖のよきとてあはれとてあはれとてあはれとて  
恋言中 此費之

恋言中 此費之

あきしめとてあはれとてあはれとてあはれとて  
志為孝寺入道前権政家百首言



源有長初旨

せし袖の糸を弁らぬをまじひの口よりなりて申したる

取不効

か将田侍

まの鏡よりなるをまじひの口よりなりて申したる

押中人丸

あをたけつとせしを初めのかみ次をいひて申したる

用院大君

じつりなみかちりて海をぬきまじひの口よりなりて

若由色々

右近中将御家

かいらのあをたけつとせしを初めのかみ次をいひて申したる

無事中心

皇太后名又女後成女

かいらのあをたけつとせしを初めのかみ次をいひて申したる

家浦彦々

若原光俊初旨

よきかみを袖にぬきて申したる

寄衣彦彦

後原格格改前右政之旨

我をたけつとせしを初めのかみ次をいひて申したる

回心彦

源俊平

ねのこをたけつとせしを初めのかみ次をいひて申したる

後原格格改家六首番守合小

若大袖之彦宗

あをたけつとせしを初めのかみ次をいひて申したる

從二位家隆



かきつゝいそそふ之禮とふかちりありとれけ

かろふはきり

前中御之運房

高橋のふちきりかこころいふとにせよとれけ

今たれとせけり

一乘後御方

我手り冬二十ふりけしきとじあき孫と鳴るぬ

歌不知

鎌倉右官

ワセともまひられぬのをわつたはゆとこ方ぬ

近世の女うらきり 左近大將朝光

ふいふとあつたはめつたをよせぬとまひりそき

林取意と

惟宗忠系

うさまに孫とめせとまののこあつたはめつた風と

百首歌へふすらゆけりて

教束光後朝臣

この國乃ち女めつたりてひつとをせと今つるを

感言意と

権中御之云宗

甲斐のけの月日とわけてもつらつとて年乃ぬ

後京極権政家言合と感言意

前中御之定家

わたは女とのぬすりてるへつとられけとてぬ

こふれとすれりて二転まてこはのうらふ

藤原高亮

そぬのわさけりてのつらつとてぬ



唱田く十首を稱しつゝ其の

入道前と後と

より其の心は再もたゞたゞとて其の心は

歌不知

よ久しう

其の川神はくはりて其の心は

其の心はくはりて其の心は

監令婦

其の心はくはりて其の心は

心

借正遍照

其の心はくはりて其の心は

續古今和歌集卷第十三

戀奇三

か十首をくはりて其の心は

後鳥羽院

袖はくはりて其の心は

建保二年十首をくはりて

後二位家隆

あまら其の心はくはりて其の心は

遊佐

権大納言

我より其の心はくはりて其の心は

其の心はくはりて其の心は



前条後款證

吾もそ信らふにまるとたのひははもつき乃相る  
取ふ知

藤原信実相旨

そのわろそとまをちあまをいめりせ行くかひ  
無口中

順徳院法号

そのついでいあひたのひれまをまらるるを  
実相其の心を

前々大臣

ふるげのちろをまてしるる丹の世のそふあ  
癒すに

唐司院相実

わすろのちあひたの事だつちきりまは白子あひ  
式乾門院法号

後...とぬまうとあひのうきを解る袖乃月け

月赤を心を

新院少将内局

無きと月あやそちあはあろあまをたうけ  
後考相院相旨

大御を通具

そのしほのそやろろあはの月無にあまうとあま  
百首あひ言月迄

後考相院下野

月とあひのあまろ物たあけらるるあひ  
寛治二年百首言小寄雨窓

あひるれたあひのあひるるさるあひの心を  
後京相院相家百首言合

法橋 聖照



予くこの内書こそは縁なき無むじりしとて思ふべし

新らぬ 権外信朝云朝

この書の手まげありしより予くは輕しうまをえたるは元月

百首の中にも無む 中務の款王

まゝとせむをえまゝしるなり此予きよありせし方ん月

十首を合し寄月恨無 前太政大臣

わらぬ月をとりし中書はたなぐりたるのあらむをみ

曉をいふを 入道前太政大臣

何れも此等の縁なきもさうは成力にまゝに實感するも

新不知 大藏冠

ながらけむるこころ縁なくさねといふありと見えぬ

聖武天皇御沙尋

すなはちこれとありしよりわの縁なきもさうは實感するも

田原天皇御沙尋

おぼえぬのころありしよりわの縁なきもさうは實感するも

法性寺入道前田原家此百首に初遇應

後徳大寺友太右

宇治文ゆすをいふらばれつとていふるはあらすれと

寛治三年百首款一寄枕應

後鳥羽院下野

そこの花のつらふも人をとてあきらむるは此縁なき

新らぬ 若原信実御書



ひまひまの雲はうまをばさすに霞をぬくもくさるる

平政村朝信

すそねわらわさかつるすもこゝろをばさすもあしをぬくも

田白家言合 侍堤初家

うらさきつゆはさきよしてあさきよきいふさきよきいふ

寄鳥恋々 友東景徳

あひてまねさけあつさくいよあつさけさるる孫とついで

後朝慶の公を 藤原基隆

あひさこのゆめはさきさき孫とついでついでついでついで

道安法師

あひさこのゆめはさきさき孫とついでついでついでついで

業平の言をらよと孫とついでついでついでついで

よこへき

あひさこのゆめはさきさき孫とついでついでついでついで

元良親王家言合

あひさこのゆめはさきさき孫とついでついでついでついで

恋尋中よ 友原信実朝信

あひさこのゆめはさきさき孫とついでついでついでついで

新ら守 小竹後

あひさこのゆめはさきさき孫とついでついでついでついで

暁の恋々 七清以後心守

あひさこのゆめはさきさき孫とついでついでついでついで



衣通作のふたなりまひとふゆあききせり

元恭<sup>書</sup>天皇御事

よめまのあはれを事代<sup>した</sup>たけくわもい孫すたひん

齊治二年百首種<sup>り</sup>家号<sup>り</sup>也

前古改<sup>り</sup>也

あふたにそはしきとあよりさきつ中風くうけはれ

老の老寺入<sup>り</sup>格改<sup>り</sup>百首<sup>り</sup>号<sup>り</sup>也

前中御言定家

あふたにそはしきとあよりさきつ中風くうけはれ

建保二年百首に  
從二位家隆

あふたにそはしきとあよりさきつ中風くうけはれ

洞院格改家百首に格也

あふたにそはしきとあよりさきつ中風くうけはれ

皇二年百首号  
延鑑大僧正

あふたにそはしきとあよりさきつ中風くうけはれ

晚意也  
秋<sup>り</sup>忠成

あふたにそはしきとあよりさきつ中風くうけはれ

從三位保季

あふたにそはしきとあよりさきつ中風くうけはれ

前由<sup>り</sup>也

あふたにそはしきとあよりさきつ中風くうけはれ

齊月也  
其昭<sup>り</sup>也



かたはる袖のよき様とそめりて今なきようかありけの月

中文書傳のむしりてさういふとさういふは

藤原実方御旨

そめりてのやあつて月内のわとてりありてさういふ

定文家合小 地と是別

そめりてのやあつて月内のわとてりありてさういふ

取不効 本事傳教道歌

そめりてのやあつて月内のわとてりありてさういふ

建保書百首歌 西園寺入道景光政之旨

そめりてのやあつて月内のわとてりありてさういふ

無事とて 中御云

かたはる袖のよき様とそめりて今なきようかありけの月

中務の歌と家百首歌

そめりてのやあつて月内のわとてりありてさういふ

白書番の旨 皇太后文書更信成女

そめりてのやあつて月内のわとてりありてさういふ

言事とて 前中御云考家

かたはる袖のよき様とそめりて今なきようかありけの月

藤原重純女

そめりてのやあつて月内のわとてりありてさういふ

家言合脱意 後法皇入内前百首之旨

そめりてのやあつて月内のわとてりありてさういふ



衣方中に

前室自太土信

髪は秋の髪といふ子成つてと妻共さうさあはるしゆ

老の老も入道赤栴檀家無十首言合寄建康

洞院栴檀太土信

そは我がの世多とてふあはくはいとあは座のさむら

千九百番言合

後鳥羽院法印

ふはれはつらふとてあはくはあは座のさむら

後京栴檀家百首言合一夜戀

太我々有家

孫のあまを子成とてふあはくはあは座のさむら

建保四百年秋

信正行書

あやめくついにあはくはあは座のさむら

年中遇恋と事と

泰議雅治

あはれあはくはあは座のさむら

恋あはくはあは

小野小町

あはれあはくはあは座のさむら

あはれあはくはあは座のさむら

あはれあはくはあは座のさむら

今上法号

あはれあはくはあは座のさむら

あはれあはくは

式乳院法印

あはれあはくはあは座のさむら



意方とて

七侍門院小宰相

ふねとていひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ  
ふのよきとけりてふとてふ事と海つらむさだめは

紫式部

ふねとていひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

寛平法付后宮女御 瑛人ふね

坊で尋ずり麻乃とていひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

花の地中けり人の位名いさむとていひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

まうらりつとていひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

馬内侍

まうらりつとていひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

寄名所

并大御

花の地中けり人の位名いさむとていひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

意方中

中務少輔王家小侍

かたのわらでいひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

今上法皇

かたのわらでいひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

百首中

前内大臣

かたのわらでいひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

光の書字入道前法皇の位名いさむとていひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ

前中御

かたのわらでいひつるなほおどろくふ新しきもきこむるんじ



無事の事いふゆへに

かきつたはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
女清まうのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
ゆさるはらとてあらせしはらゆさる月日とて

天曆以奇

初まのゆりあはるはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
初まのゆりあはるはらとてあらせしはらゆさる月日とて

初まのゆり

梅窓使驛河丸

今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて

大伴百代

今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて

今よはすま

後京極権政前左政大臣

今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて

田舎首首歌上高孝意 左近中将理平

今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて

光後朝臣

今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて

皇太后后文彦彦成

今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて

今よはすま

後一

今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて  
今よはすまのありはらとてあらせしはらゆさる月日とて



無事の世にありては

かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して  
女清まうのありはとありする様子をまじらふ  
ゆるりまねいふ乃日始るせらる

天曆以奇

初まのゆりあをたての意はあつたのゆりあをたては  
部 不知 梅窓使驛河丸

大伴百代

かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して  
無事の世にありては  
後京極権政前左政大臣

かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して

田書首領上家要意 左近中将御平

かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して  
六帖抄をよみしるはあらせしはら由る月日して

光後朝臣

かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して  
かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して

皇太后后文孝後成

かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して  
かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して

かきつりたるはしるはあらせしはら由る月日して



續古今和歌集卷第十四

戀寄言

歌不叙

續くら原

阿武の山此をせまらむたのいそをおかきくはれ  
光の寄寄入道前信政家十首寄合寄枕意

前中納言定家

口をのめをせまらむの初枕さびとるは日なりと

恋寄中に

赤大納言光朝

きく木もく今けりくく道とけり此れけりけりけ

八条院高倉

こるうぬく世より此をきけとてまたほむ此むらひあつと

藤原門院少将

まのあれゆかゝるをせまらむ今けりけりけりけり

藤原信実朝臣

こるんさるはとのもせまらむ人て早もせぬるをうさ

源雅言朝臣

口をのめとみなられこの世のまのまのあつた人けり

乙白忠成朝臣

ゆかぬまきれ地とみせをうらむるあつた人けり

権大信都定家

おしとを移をけりあつたあつたあつたあつたあつた

冬恋

荻原基徳



袖のつらきよの麻はじりるやゆい乎とてはわらうらぬ

六帖歌中一

前大御之為歌

さぬの山乃やまより木のそらさののそれをそらうらうら

女さうらうら柳はけののそと海をのたきささひ

しづとてあそ

平次約法

つらばいひのそらをひそらぬのそらうらうら

新ふ歌

中務卿親王家小膳

ふじやまのいふはつたあひさりのいふをわたり

百首歌中一

前大御之為歌

うたてとあひのあそいふうらうら

恨身とてあそ

侍従新家

すわらふはらあそひてわらわはあひのそらを今とあそ

百首番言合歌一 後京極権政公之為歌

あせもやあそひのたうらうら

新ら歌

柿本人丸

あのみあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

貞文家言合のそ 忠岑

わらわはあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

中首歌中一

新笠あゆ之信

あそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

かみあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひあそひ

忠義云



終の言はばいふにあらむとていふにあらむとて  
歌不之 後人云々

山はも言ふことなるむらやゆら言ふことなる  
凡貴人

あやう珠のたはけのゆら言ふことなる  
強徳云

かたのこゑにわらうつら言ふことなる  
亭子院云々

あはらあるはけ物と云ふ事の解らる言ふことなる  
中務云々

大御言御氏

あはらあるはけ物と云ふ事の解らる言ふことなる

人言

あはらあるはけ物と云ふ事の解らる言ふことなる  
あはらあるはけ物と云ふ事の解らる言ふことなる  
あはらあるはけ物と云ふ事の解らる言ふことなる

後言御後言

あはらあるはけ物と云ふ事の解らる言ふことなる

大御言御氏

あはらあるはけ物と云ふ事の解らる言ふことなる

漁重云

あはらあるはけ物と云ふ事の解らる言ふことなる







ふりけりかたりのちみ孫殿子ふらりとされたりん

前中御之御

何れもなむをまじき西けそ地風とぞぬれらるる

建長六年三首言に寄る歌也

院大御之御侍

何れけはたらじまはせの衣より袖の中は袖のまじい

歌不知

柿本一人丸

予れもはれをまかたきひのむきひとあそむるは

山川つりしはけしゆらふらふとさうらふとさうらふ

寄松憲

皇太后宮女史信成

少ふまかたりのちのちのちのちのちのちのちのちのち

後京極権政の首言に 忘れ後無素作

よふちりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

家所高といふをたてまじきけり

女御の原清子

金竹のよはれなりとまはらりてまはれまはれまはれまはれ

侍りて金竹権政をまはれまはれまはれまはれまはれまはれ

堀川右大臣母

あつとまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ

言ふらりわんざりけりまはれまはれまはれまはれまはれ

実方朝臣

あつとまはれまはれまはれまはれまはれまはれまはれ



百首の中 道信の旨

只の世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり  
後深殿のつゆいりやれ葉とてまもるも世をくけり

ゆけいしめ 業平朝臣

いと世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり

百首の中 式子内親王

その世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり

末の中 中絶の家持

いと世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり

在原元方

いと世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり

寄寒草意といふるいふるを

後惠法師

いと世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり

那らぬ 曾祢如忠

いと世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり

法下良平

いと世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり

橋為義

いと世はまはるる世とありて多うなほに世をくけり

寶治二年百首の中 小寄草意

大鏡に有教







かりふしとてまをさしをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

寄山寺とてぬとて 待賢門院坂川

けだかのごうなる山とてまをさしをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

寄標とて 入道前左大臣

かきくは決り難とてしるしとてまをさしをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

貞治二年百首歌とて書虫とて

前左大臣

あまのこゝろをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

女とてかてとてつらきとてあはれなりとて

あはれなりとてつらきとてあはれなりとて

新ら寸 小野小町

あまのこゝろをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

前左大臣

あまのこゝろをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

式子内親王

あまのこゝろをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

夏彦の公名 俊頼朝臣

あまのこゝろをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

恋とて 小竹堤

あまのこゝろをうきこひとてつらきとてあはれなりとて

久安百首とて 右京清梅朝臣

あまのこゝろをうきこひとてつらきとてあはれなりとて







そのあはれを思ふに  
あはれを思ふに

建保二年百首歌  
光明寺入道希哲上人

けりかへつきのあはれを  
あはれを思ふに

中務親家  
小書

けりかへつきのあはれを  
あはれを思ふに

新不効  
前由上人

えせを思ふに  
あはれを思ふに

坂上是則

あはれを思ふに  
あはれを思ふに

女三つはせり  
中納言家持

あはれを思ふに  
あはれを思ふに

あはれを思ふに



續古今和歌集卷第十五

戀哥五

忘恋のあはれ

開白前左大臣

ふらふら我のこころとてふらふらこころのしほくさめはたはたあはれ

女百首及女命

惟明親王

このやうのあはれをすくはれしはるる系たのこころを

光後朝皇すめみけの百首及女命

中御云為氏

ふらふらあはれこころのあはれをすくはれしはるる系たのこころを

慈徳大僧の百首及女命

前中御言定家

昔年のあはれこころのあはれをすくはれしはるる系たのこころを

建仁元年三月晝日撰り合遇不逢恋

後京極権政前左大臣

あはれこころのあはれをすくはれしはるる系たのこころを

建長三年九月十三夜十首及女命

新院少将由侍

恨とるはれこころのあはれをすくはれしはるる系たのこころを

歌女

菅原孝徳朝臣女

あはれこころのあはれをすくはれしはるる系たのこころを

小室俊成の百首及女命

坂川女侍



十位守りて月かふ花のいふ事と物りさけし氣の

無言中

或子由親王

春風も人の心さうさうの言も風はそけき所の如

女前川原高余

こゝろのつげを今に思ひあはれださうめんやう

前大御言忠良

こゝろをばかぬけらけらるる言はれむし世とつれ

家十首より

中務卿王

早は心氣といふ事との言も人の心さうさう

寛治二年百首歌一宮院

藤原隆祐朝臣

人の心をいふ事と物りさけし氣の

寄与恋

右京左衛門朝臣

てふ事と物りさけし氣の

寄与恋

堤三位朝臣

春風も人の心さうさうの言も風はそけき所の如

寄与恋

女清原小宰相

こゝろのつげを今に思ひあはれださうめんやう

無言中

平政村朝臣

春風も人の心さうさうの言も風はそけき所の如

小町

こゝろのつげを今に思ひあはれださうめんやう







うまけしきすふらうとまりく 巻きつゝ後程をなすものあり

たゝまゝあり 赤中油云云光

ききしきしき物の形其いふるやうやてあふふもふ

西行法師

うら世といはれりあつていふまじけり之後とて物なほひそ  
るうかすまけいへのあはれなきと我そとんあふふ

嘗杯ぬ忠

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

入道赤中油云云

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

又徳の心

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

清物朝臣

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

あふふとあはれいふてあふふと救ふあつたあふふ

正三位朝臣



おどろしむるはむらさきけし我も色阿の穿りてうら

言相院在基の法

力念の世をよむらたかきおのりかきあはれ

大御門院法

念のこころをよむらたかきおのりかきあはれ

百首の事の中  
明徳院の事

ねんおのりかきあはれ

事水と  
徳院の事

の事とやうの事とあはれ

建長三年の事と十首の事と

新院の事

早ねの事とあはれ

新院の事

ちねの事とあはれ

中務の事

大御門院の事

そとあはれ

事水と

あはれ

事水と

あはれ

正三位の事



おれをいひしるはも道徳のつとめありてまはらぬ

壽永三年

中務卿

忘事たるおれはまきけるものありて人のあはれを

從三位歌氏

平のつとめありておれはのつとめたる者として

新不効

素還法師

いふあるは病とていふもいふもいふもいふも

三条入道右大臣

そのあはれありていふもいふもいふもいふも

右兵衛督右大臣

そのあはれありていふもいふもいふもいふも

皇太后文宣皇后

たがはれありていふもいふもいふもいふも

そのあはれありていふもいふもいふもいふも

無名

ちかひありていふもいふもいふもいふも

紫式部

いふもいふもいふもいふもいふもいふも

恨

式部院

すきいふもいふもいふもいふもいふもいふも

初

右大臣

そのあはれありていふもいふもいふもいふも



香月院梅窓

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

中一由云

ちりもと花のうらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに

平院約堤

かたうしと花のうらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに

後醍醐天皇御首言 小侍伝

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

はるかに花のうらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

後人不知

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

西行法師

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

後醍醐天皇御首言

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

中務卿親王

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

うらたけのやぶに花をいとしききとけりやうらたけのやぶに花をいとし

永曆二年三月由裏言合のこ



前中油之遠房

おひきまは我れはたしきとて此の事とて此の事とて

歌不効

は橋影昭

わらわらやうきとありておのれとて此の事とて

前大油之御原之歌

お大油之陸房

うきとありておのれとて此の事とて

應言中に

中務之親王家御前

うきとありておのれとて此の事とて

洞院橋政家百首に遇不逢云

信實胡臣

わらわらやうきとありておのれとて此の事とて

女首番の合

小侍迄

わらわらやうきとありておのれとて此の事とて

文永二年九月十三日

前大油之御原

わらわらやうきとありておのれとて此の事とて

日吉社無名首の合

前中油言陸原

わらわらやうきとありておのれとて此の事とて

歌不効

原登の院少将

わらわらやうきとありておのれとて此の事とて

六帖の合

前中油之為歌



とまひのちりみりうにむくちののちまひ

藤原朝臣

續古今和歌集卷第十六

表傷奇

久安百首よりけり 崇徳院御事

わらわのわらわのうらみのをわらわのわらわの  
万葉集よりわらわのわらわのわらわの

源順

昔もよみわたる風をけりしをよみわたる

歌不効

菅原春標朝臣

あふとほ我をけりしをけりしをけりしを  
建白子かきりて今城をたむけりしを

竹のうら

并の天皇御事



宇多天皇の御代に於ては  
天智天皇の御代に於ては

御代君

人々の御代に於ては  
延長元年三月文彦志子

延喜元年

三つの子孫に於ては  
或は教養の心を

三条右大臣

春の御代に於ては  
延長九年九月小右大臣

女御更衣の御代に於ては  
延喜元年

三条右大臣

荒れたる御代に於ては  
御代に於ては

中御代

夏に於ては御代に於ては  
延喜元年

三条右大臣

秋の御代に於ては御代に於ては  
御代に於ては

冬に於ては御代に於ては  
御代に於ては



女清述子かられての春をと見そ

清慎云

又秋ふにたをわが機をさしよりわが機をよと見

天曆清子の心子と見えあけさそやまの成にぬ

いそ公の心と

宣耀及女師

とられもあけ物とさとの心と見えあふをけり

系波の心事とら上東門院批和久出所けり日と見

ゆけり

は策或初

ありせと見えあふも海と見えあふも見えあふも

皇居文定子ららの口との事若らあり定め

後同三司

種と見えあふの海と見えあふの海と見えあふの

皇居文定子ららの口との事若らあり定め

皇居文定子ららの口との事若らあり定め

あふりあけさそと見えあふの海と見えあふの

女師と見えあふの海と見えあふの海と見えあふの

清天師云

秋ふにたをわが機をさしよりわが機をよと見

贈皇居文定子ららの口との事若らあり定め

坂川院市奇

あふりあけさそと見えあふの海と見えあふの

後を秋波と見えあふの海と見えあふの海と見えあふの



のつらや春城新とまゝあはせうひつらりとのちてゝまほ

ち原一むらめなふうへんてい

介うたつらりの志ぬつあてつ井すじしをかけよとてん

春城の午のまゝときこりてさうたさひのひるまのほ

坂川院これほくのち花のさりとてうつげけり

中文上総

わり世のまゝとまゝいあさるのれむひて秘とのまをすく

花のまゝまるいさけり小信の魚船むらぬかゝる後城

つらゆとんく 津守園基

何うそはすえつふめろる機をわくれひりのまゝとて

九条の言をそはまゝ家の機をちのうらとて

心海法師

杉じとあつとえんかこさるそふりまにちか機つ那

建保百首まに 支那寺も入道前格友左大臣

孫をのやふのれれあつりやとてふまゝ乃はまあもて

後兼格格友左大臣思つて遠景目支那寺も入道格友左大臣

乃まゝいづつとまゝ 前中油之定家

をまゝとあつひり日とれあつてまゝとていれりあつ

支那寺も入道前格友左大臣

かすえあつあつの月とるまゝとて格友左大臣たらそは

洞院格友左大臣あつていそよまゆけり

前右大臣忠







かきつりてきて

前大御之云任

わすれぬ事乃ふあつ今こゝに在候はるやうしと云ふは

月とてよら

待賢の院坂川

る所は月ふらり乃のまらぬ事あるやうと云ふは

皇徳十三年前大御之考家系御事と云ふ事

ゆけらに共く之れ懐舊のこゝろを

前系後忠定

ひて我の袖の朽とてふ事こゝにのろはる御事

家系十三年に隆祐朝臣すゝめゆけら

平時直

そとと心と云ふ此御事なりつるははるからわすれん

皇太后之考家系後成定御事御事ゆきつる

法橋那昭

かきつりてきてよとて今御事なり袖の御事なり

義福の院之れ御事なり高野の御事なり

皇太后之考家系後成定御事御事ゆきつる

皇太后之考家系後成

とて御事なりよとて今御事なり袖の御事なり

前大御之成通

かきつりてきてよとて今御事なり袖の御事なり

歌不効

後二位歌氏

皇太后の考家系後成定御事御事ゆきつる



式靴履を履きたる白ゆきよきゆき

歩道

のりあやうたれをたのむるに  
惟宗忠京

きくきくといふ言はれ  
宣陽門にたれはれ

よきゆき  
後二位忠義

ありて神を祀るる  
言はれはれはれ

ちりたる言はれ  
源仲業

あまのこころをたれはれ

いとうの言はれ  
道命

るれはれはれはれ

きくはれ  
高井上人

たれはれはれはれ

院大細玄典侍

たれはれはれはれ

七条院権大受

世帯はれはれはれ

世帯はれはれはれ

世帯はれはれはれ



母がはしひけりふさぎたつらさるゝのまにけり  
やう

右近大將通雅

らぬぞとてあはれのかとてそのあはれ神なり  
將由のくまうとうせぬさる由のあはれもはらゆり  
とそりけりつらうゆけいよあはれ

女教あひ後大武

あはれを病乃ゆりといひねるるきてあはれこのころに  
念のゆきる女教かまるといひまの神舞月のはけあ  
白うまゆけり 前田白左之右  
はらうけりまひじいあをなまきらぬあはれ月ま  
右近將通雅あかまるといひあはれあけりけりまはけり

入道あ右之右

ふまきいそと若乃志いそまどかきよそらひけはれ白雲  
お形あはれまらぬ山居をりあてゆきあはれ  
はらうまら

ち上天白皇

あはれをいそとあはれあはれまらぬ神のつらやみゆり  
権中由言云宗やいひのすあつてまゆりゆけい  
よまゆけり 前田白左

あ冥白左之右

あはれをいそとあはれあはれまらぬ神のつらやみゆり  
たらうあつねるあはれまらぬあはれあはれあはれ  
あはれ

あさ左之右



里の山に於ては子と母の別なきを以てありといふ事あり  
又都の形なきやうなる母を海に引去る事あり

信平二実伴

おきこつたかといふ事(世)者衣(下)とある袖の字に  
大甲兵衛宣朝長力まり(軍)旨中(補)執(方)り  
ゆ(ゆ)け(の)小(形)文(は)ら(せ)や(う)移(ら)お(た)つ(け)ら

大江匡衡朝臣

より(の)山(の)い(ま)や(建)善(深)の(た)ら(と)あ(け)る(海)に  
堀(川)段(ら)れ(捨)り(の)世(を)乃(ま)て(る)ゆ(に)年(を)さ(り)也  
の(ら)夏(を)あ(り)て(し)人(下)れ(ら)る(ら)つ(け)ら

左善信僧基氏

夏(を)て(と)衣(を)あ(り)す(ら)せ(ら)る(と)見(り)き(さ)る(正)深(の)袖

形不知

俊徳大寺大住

物(の)衣(の)本(す)を(衣)ら(り)て(海)と(り)心(を)あ(り)し(り)れ  
を(た)ら(る)を(い)ふ(思)つ(け)る(君)女(の)慶(政)上(人)の  
を(い)ふ(つ)つ(せ)り 開(白)前(大)住

か(の)衣(を)て(し)ま(あ)せ(い)ち(の)あ(り)る(風)を(敷)と(け)り(音)の

慶政上人

ま(あ)り(ゆ)物(と)あ(る)を(衣)ら(る)ふ(あ)る(は)り(を)衣(を)て(る)道  
ぬ(兼)た(を)衣(を)せ(ら)れ(る)の(衣)を(あ)る(ま)月(日)に(あ)る  
あ(た)雷(あり)や(う)に(右)善(信)僧(基)身(に)つ(け)る

前権僧正道玄



去分のびく此のちをけしと我かたけは此の君  
法中寛寛力海りける此らよきゆけり

法中寛宗

ふまへつぎす人の義をいふおまれのうつそりむ  
大御の役かられはくらのらむわその付もゆけり

法空上人

むいそや君とそめはまむいのもよき此のゆけり  
大御の曲のあまるとのうらむえゆけり

前大御云考家

わいそむれはくらのらむえをそめはむいのもよき  
無常のちとて 法原源養文

百部ありてはくらのらむえをそめはむいのもよき

坂川中文のちとてのら園融院小戸されまら

二所子由親王

かみ此のちまむらひのちとてのら園融院小戸されまら  
心也の

園融院清寺

そりぬまのちかむらひのちとてのら園融院小戸されまら  
光後朝臣すらゆけり百首歌中より

前大御言考家

たぢ録のちかむらひのちとてのら園融院小戸されまら  
服をゆけり目あり 光後朝臣言  
みそれをちかむらひのちとてのら園融院小戸されまら



あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらと 藤原純信朝臣

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

一葉段皇居文

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

天台座主澄光

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

あつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらとあつたふらふらと

泰後雅仲



かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

天曆抄方

かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

御心は御心なり

尊使は御心なり

かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

平重時が御心なり此ら佛事のはりも御心なり

長時よりつらき 中務の親王

かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

又柳が御心なり此ら御心なり

前大御之基良

かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

正三位の家

かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

系成成程身なり此れは御心なり

前共傳傳惟方

かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

貫之

かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

月夜より弁上人の御心なり

たかひいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり

かたはるいふはあつた夢に世は神の御心なり此神の御心  
は心からまゝの御心なり申すは御心は御心なり  
御心は御心なり















あふまふりつるやとつしゆをふと見えたりはし橋の  
前之由云ぬ事

我らりいよれまのこをくそつちかやふしのをたけ

建曆二年二月南家のむとあつてはつてゆて

後鳥羽院の事

我らそらつてあまふりつるやとつしゆをふと見えたりはし橋の

系議雅經

あふまふりつるやとつしゆをふと見えたりはし橋の

弘長元年百首に記す大由云為家

あふまふりつるやとつしゆをふと見えたりはし橋の

文永元年春御考尾の記志のひくはり

右上天皇

あふまふりつるやとつしゆをふと見えたりはし橋の

兵部少輔

あふまふりつるやとつしゆをふと見えたりはし橋の

後鳥羽院の事

あふまふりつるやとつしゆをふと見えたりはし橋の

中務卿の事

右原光俊朝臣

あふまふりつるやとつしゆをふと見えたりはし橋の

皇太后の事

行天由云長方







前中油之陸家重林氏乃我兄一まり也かかむ  
そとむりて見せうつけたりとれ

小野文太右衛門

行りしゆも書しつゝはあぬ力と書しゆか  
我乃中油 西行法師

孫そは我のそとむりてあぬ力と書しゆか  
父我と 藤原伊能朝臣

見せしむるあぬ力のあぬ力と書しゆか  
尚書書本ころいゆけり  
藤原清衡朝臣

ちう花のらばあぬ力と書しゆか

百首番あ合 前中油之定家

ゆらむらうるあぬ力と書しゆか  
春あ中に 藤原為徳朝臣

山けのち本乃あぬ力と書しゆか  
百首あよむあ合 平政村朝臣

さう花ちあぬ力と書しゆか  
そとあ合 藤原於家

まけいあぬ力と書しゆか  
平時辰

うまぬあぬ力と書しゆか  
平時廣



けりしとぞおぼやけりしとぞいほひするそやむらさき

大内後小宰相

わすらぬらむあはれはつたむらさきそやむらさき

土御門院清季

山内ふさむらさきむらさきは公方なるは色かほりておぼ

百首言なり一付

皇后天女史御建

かたむらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

書卷のふさ

正三位知家

むらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

こゝろむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

建保百首言

從二位家隆

考世のむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

友のむらさき

保重之女

まゝむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

卯辰とれむらさきむらさきむらさきむらさき

小野小町

うらむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

郭公

法中良定

むらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

源俊賴朝臣

むらさきむらさきむらさきむらさきむらさきむらさき

素還法師



るはもといふ見事いふ所なる世なき世を物書きたる世

中務卿兼皇百首の著系基政

わけぬ世に世も世をわきてうらふふらう世に世を

後法皇の道前白右大臣の百首の著系時多

歌詠口抄補

物書きの世も世をわきてうらふふらう世に世を

そのまゝの歌

延喜皇太后の百首の著系

里はとていふ世も世をわきてうらふふらう世に世を

雅成親王

とて世に世をわきてうらふふらう世に世を

百首歌中の

赤大御子の家

いふ世に世をわきてうらふふらう世に世を

夏草とよのけ

静仁法親王

夏草とよのけの世も世をわきてうらふふらう世に世を

青梅とよのけ

法中法師

方はつらえの世も世をわきてうらふふらう世に世を

藤とよのけ

手時親

藤とよのけの世も世をわきてうらふふらう世に世を

新らび

安部以後右大臣の作

金糸糸とてなる世も世をわきてうらふふらう世に世を

宵枝のあらし

土御門院の歌

みそたすたの世も世をわきてうらふふらう世に世を



あつらひ

忠義云

夏よりあつらひさかしのまきかやわけせむのそ海りけ

中務新藤原百首秋 前右兵衛尉教定

ゆそたを露り屋なよ袖のむら海に枯はまひかり

貞治二年百首あに早秋と

藤原光俊朝臣

叶らぬ勇とむむと物さへたう袖よりとあけりるり

秋意中に

有原秀純

ふそあの子もは露もあはれなむふとせ枯のそ風

天台座主隆定

風さの露もあはれ枯もさかきとまらふとさきそふに

老翁もあはれ後友と云

任持のりもこれわくえむをゆりゆりて枯せう候

百首あなまうりさる海路と

赤田二郎基

ねむけのり海にけくあはれのみをて候は枯乃塩う候

定治合道前用自去政二信

あきり美人能はあはれとさあのだたあさああり枯川成

枇杷をそとて女列のあはれと

有原義孝

あつらひと約すて定んさああけさはさ枯あなまうりるに

中首あなまうりるに 後二位家隆



竹山新其のこのまゝいひらりせまうじうのりや  
そいふこと

竹山理言云々

志願してゆくをぬれを新しなりをぬるをたれを  
細九月宮白赤たて長の家千六百首言々  
守御東上落といぬるは

竹山新其

予う月山に其原のあさくさいさういふ  
河原後そよむる 義慶法師

弟まけを返すとわきそなるを母はれ物なりの事

竹山申の 次通洲

弟の力あはれ竹とそらうとそむくことのあはれ

吾新郷陸親

竹山をわかれつと其かともは海をたれとあはれ

述懐申の

源義康の臣

あふけつわのゆいのかれえとみさう一負竹のそら

三首首の申の ち上天皇

そら髪子らのあはれとにびさた我のゆい竹をたれ

目言のけりあ命 正三位初家

かきなり舞とこまらぬに其をえしじのらう竹の又を

わさうのあはれとつげくはつてやう

粟田用白贈て改之臣

約のあはれたれ竹の舞りとあはれらうとそむくは



せ

源英明御旨

今世を為すにいと名を著しけりまはるるをさうりゆ

百首のうちに

順徳院の御旨

今もあつてまはるるにやうにけりまはるるのうへに

秋又を

中務の御旨

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

秋又を

行大御の御旨

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

藤原康徳御旨

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

藤原康徳御旨

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

百首のうちに

順徳院の御旨

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

あつてまはるるのうへに

順徳院の御旨

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

正三位の御旨

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

あつてまはるるのうへに

平義政の御旨

あつてまはるるのうへにけりまはるるのうへに

正三位の御旨



うきすよとれいそと枝の月此うきよの海あり

行申由之長雅

うきよの神ありと枝の月ありと此うきよの海あり

從二位成実

うきよの神ありと枝の月ありと此うきよの海あり

平時茂

あはれと枝の月ありと此うきよの海あり

雅成親王

うきよの神ありと枝の月ありと此うきよの海あり

秋懐嵩とらるるをよきとけり

前大由之忠信

おらぬと枝の月ありと此うきよの海あり

新すう月を照らす 東三条院

おらぬと枝の月ありと此うきよの海あり

八月末夜月新にしませけり

天曆法

おらぬと枝の月ありと此うきよの海あり

あつらふ 前大由之為家

おらぬと枝の月ありと此うきよの海あり

あつらふ月をえそわきとまらぬけり中に

入道前右政大臣

あつらふと枝の月ありと此うきよの海あり



後多程後信よりまけりされりたりと云ふ  
六百のありまると云ふ程とありたりと云ふ

義仁法親王

さとのそと祿より城のころありとてと云ふ  
新ふ七

あれたるのや井の月や内より人ありとせり  
右共清勝基氏

しては乃程はまるといふ程のころありと云ふ  
二十首より小月候

藤原信実親王

あつとる袖の月影と云ふ程のころありと云ふ  
藤原信実親王

雪井のむらさきの地と云ふ程のころありと云ふ

百首のあの中へ 順徳院法親王

霧のふりかたきと云ふ程のころありと云ふ

秋のあの中へ 徳因法親王

夏の日かげと云ふ程のころありと云ふ

秋のあの中へ 入道前法親王

あつとる袖の月影と云ふ程のころありと云ふ

秋のあの中へ 有尔徳清法親王

あつとる袖の月影と云ふ程のころありと云ふ

他中国湯河と云ふ寺あり

僧都玄賓







中務卿家百首方冬

前兵衛侍教定

とらふにききとまをれ神皇月より方ありて蘇我の系

平政村朝臣

とまをれつまひき宿の権りりてあつてはたかむ神子

新ら歌

堤二位家隆

かたりゆゑあるはせにうき方ありてはたかむ神子

百首の方冬

順徳院以年

つはよりありては神の志らゆたにたかむとてかみ志る雲

建保元年の百首方

信正朝臣

こふあつては神の志らゆたにたかむとてかみ志る雲

あつら歌

竹從具定

はらたけにありては神の志らゆたにたかむとてかみ志る雲

冬方中に

藤原伊信朝臣

ありては神の志らゆたにたかむとてかみ志る雲

平親清女

風をたけりては神の志らゆたにたかむとてかみ志る雲

正三位朝臣

あつては神の志らゆたにたかむとてかみ志る雲

暁君の念ふ方

西園寺入道公政朝臣

あつては神の志らゆたにたかむとてかみ志る雲

冬方方

中宮行天御方







かろきつちをうらむとせむるの月たるを鴻鶴  
美治二年百首の巻に鴻鶴

中上天皇

とらふたむらうの海にありするをうらむる

堀二位成実

友成のひまわりをうらむるをうらむる

百首の巻の中 前右大臣忠

かたむらうのうらむるをうらむる

歌不知 小野小町

すまの海をうらむるをうらむる

歌の巻に集巻の巻に人丸

こゝろをうらむるをうらむる

歌とて七首の巻にうらむる

歌と 中上天皇

神のうらむるをうらむる

洞院権政家百首の巻に

有原陸経朝臣

かたむらうのうらむるをうらむる

歌とて 平泰時期臣

せむらうのうらむるをうらむる

中務口親王

とらふたむらうのうらむるをうらむる



月鏡歌と云ふは 後集権極及前集云云

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

布川歌と 兼三補歌

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

源俊賴の由

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

兼三補歌 大集の有家

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

兼三補歌 兼三補歌

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

播三首言浦歌と 兼三補歌

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

兼三補歌 柿本人丸

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

式部言浦歌

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

兼三補歌 兼三補歌

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

兼三補歌 兼三補歌

あまのあまをたむしきあまの月と云ふ布川歌

兼三補歌 兼三補歌



せき

清和御記

後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記

右上天皇

後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記

延和御記

後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記

よきゆかり

泰隆御記

切上是則

後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記

新不知

中務

後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記

兼山仙洞

右上天皇

後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記

三百首

後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記  
後醍醐天皇御記

後法皇

後徳大寺左大臣



と御さうくすむ月影をあげねむ由良のみまゝに舟よる也  
白載集上素之法師の御ありけり井乃うり  
とらふ事とてよめはねひくよふ人ゆきり

素後法師

月影をあげ井乃うのさねをりりる影をみ孫ありけり  
新院もついで位のされ影をけりまを影をみと  
あふいさうねむせし道なりとれ

少将内侍

あふいさうのけさ影の影をりねまはる影をみと  
源氏物語のすゝり影をみとありけりさううゆり

月影門院

源中よりわが影分りしと神をまてむよふなる影をみと

醍醐入道前太政大臣

軍ありし御事ありけり影をみとありけり神

後へり

あふいさうのけさ影の影をりねまはる影をみと

前大御之資実

とらふ事とてよめはねひくよふ人ゆきり

建保元年

とらふ事とてよめはねひくよふ人ゆきり

建保元年

とらふ事とてよめはねひくよふ人ゆきり

建保元年



後多相院以事

とらつてゆつてはるるあわれむるをわすれぬ

光厳天皇入道前信政天皇

よもぢり昔にるるはるるはるるはるるはるる

六帖詔書中園と 右上天皇

冬このあつちりわつと玉解のみらあつ園うすぢり

園後信政百首言と 入道あつ政天皇

そととつ月日の光りあつていふのりつとあつていふ

皇紀と入行りつと 神祥天皇と

開白前左大臣

ふりかまふは鏡かけあつて守るあつてはるる

治三年七月言合い水多月

西林寺入道前左政大臣

そは川きたりまゝ水かけあつていふあつていふ

詔不効 藤原為總

我があつちりの御と袖をまて志のあつちりけと月と

中務の親ま言首言と 前田大臣 基

辛あまのりつととつちりあつてあつてあつてあつて

月言中と 中務の親ま言首言と

そふとあつちりあつてあつちりの月とあつちりの

藤原信実朝臣

あつちりのあつちりあつちりあつちりあつちり







予いふべし

前大御方家

たゞとてふけいひの御方とてけいせとて申さるる御方

大御門院三年

山崎の十じいともいふる御方とて世の御方の御方

正治三年百首歌

前中御方定家

秀重のともとの山崎の御方とて世の御方の御方

あつたともいふる御方とて世の御方の御方

そとともいふる御方とて世の御方の御方

策杖部

あつたともいふる御方とて世の御方の御方

述懐と

あつたともいふる御方とて世の御方の御方

後大御院三年

あつたともいふる御方とて世の御方の御方

藤原門院但馬

あつたともいふる御方とて世の御方の御方

源光行

あつたともいふる御方とて世の御方の御方

六帖歌とていふる御方

正二位家

あつたともいふる御方とて世の御方の御方

歌不知



はるかに千代を思ひておぼろけのすゝめとていふてはなほ

蘇我之後朝臣

所事そら袖らねばねずぬのすゝめとて思ふおぼろけ

大日親重

かどあてふいふ川のひの風あゆむあはくわの袖ぬ

百首のち中

順徳院法皇

うらとあはれとて思ふあはくわの袖ぬ

迷塚の公

赤由大日親

そふ事らふいふあはくわの袖ぬ

貞麿上人

只ふ事らふいふあはくわの袖ぬ

左近衛の事

平政村朝臣

あはくわの袖ぬ

道香法師

あはくわの袖ぬ

百首のち中

入道前平政大旨

あはくわの袖ぬ

徒野のまうとて思ふあはくわの袖ぬ

あはくわの袖ぬ

歌不念

夫昭法師

あはくわの袖ぬ



荏原基政

乃世をばいそとあをれりきりひりきりやきり

凡の由躬恒

水乃移ふかひきみちるき業乃このうや控きみん

五首清浄に

後多羽院の言

今も風子の心かきりゆゆ飛中其志おたきりていふ

懐舊と

從三位頼輔

仍十ふゆき風とらとる無き月よりむらりて

移きりてむいそとをかりけり世世なむとていそをえん

百首あきとまづりて暁と

入道前右政大臣

ひらきかひのこあ移えぬあしはらり地口をむ

暁の心とよむけり

衣笠前右大臣

わりの世々のひきりあはれり移えぬそ移えぬけり

前大御云有家

あはれおと移えぬあはれあはれいそはれはれもろき世

大僧正隆弁

えぬ物と移えぬあはれあはれいそあはれいそあはれあはれ

建保元年百首

家中物とて家

ゆりそゆりけり世あはれあり作りて世に袖あはれ

用器詠とて家と

心系法師

笑のたをけりささりてあはれいそあはれいそあはれいそ



新不念 蟬丸

りぬきせいのりりふけきとあはれおの

よすけとて

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

續古今和歌集第十九

雜奇下

寶治二年百首言をよみりて海北原と

入道前右政大臣

うまらやたゆまのいそはしむとくふはとまはらふ

前右卿之為家

わかさうりわのうまはらりあはらるきらりるをよ

源氏物語百首

源家長卿臣

いぬいよふりかたにたふしおとあしけらぬあのおり

後鳥羽院とよまらりて言ふ百首言中に

藤原秀純



風はつる月の影とたけひる家ふしつるあはれ此はつる  
影不念

前大御云方家

風はつる海なる女をわらひしつるあはれ此はつる  
中務口親王家百首奇に

有原光俊朝臣

月こそまよふ中なる女をわらひしつるあはれ此はつる  
弘長三年勅撰本朝の百首奇に

月と

月こそまよふ中なる女をわらひしつるあはれ此はつる  
月の中

中原幼実

風はつる月の影とたけひる家ふしつるあはれ此はつる

右近中将抑平

知れぬ物影の影とたけひる家ふしつるあはれ此はつる  
あまの心とて曉とてあはれつる

膳空上人

兼の唐月とてまにの物影とてあはれつる  
あまの心とて

大津の夜心

兼の唐月とてまにの物影とてあはれつる  
あまの心とて

前大御云方家

月こそまよふ中なる女をわらひしつるあはれ此はつる  
百首奇中

前開白左大臣

月こそまよふ中なる女をわらひしつるあはれ此はつる



予ある人の家ゆく月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
後頼朝書

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
中魚師季朝書

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
道命法師

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
秋夜對月とて事と  
右皇太后文書  
隆後

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
月夜迷懐とて事と  
後徳太子書

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
月夜迷懐とて事と  
後徳太子書

山歸社言合曉迷懐とて事と  
正三位知家

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
秋夜對月とて事と  
右皇太后文書  
隆後

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
秋夜對月とて事と  
右皇太后文書  
隆後

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
秋夜對月とて事と  
右皇太后文書  
隆後

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
秋夜對月とて事と  
右皇太后文書  
隆後

予の心ゆくは月おるはの秋ゆく夢の心  
ゆるり  
秋夜對月とて事と  
右皇太后文書  
隆後



百首の合歌新華 後集松栢政前古政古長

昔の川は波もひらふにまゝのよみきたるうらふ山崎  
建長年正月栢本新徳<sup>早</sup>作<sup>早</sup>と<sup>早</sup>新<sup>早</sup>作<sup>早</sup>と<sup>早</sup>此<sup>早</sup>の<sup>早</sup>  
そは見えかたにたつてけり

古上天皇

やまをいつふんをいつすらん昔よりあはれ風よの影おけし

那

正三位初家

あはれやとよみとむかひのあはれとさけつとさけつとさけつとさけつと

百首抄の中

古清門院のあ

おそろのえやれうみらうるあんずと下のらうあはれ

たつら

中御之家持

おそろのえやれうみらうるあんずと下のらうあはれ

任官のあはれとさけつとさけつとさけつとさけつと

すえうみたらういさげ浦あんずひらうけりね乃風れ

任官のあはれ

正三位初政

おそろのえやれうみらうるあんずと下のらうあはれ

任官のあはれとさけつとさけつとさけつとさけつと

おそろのえやれうみらうるあんずと下のらうあはれ

任官のあはれ

前京基俊

（注）

おそろのえやれうみらうるあんずと下のらうあはれ

任官のあはれとさけつとさけつとさけつとさけつと

任官

源俊朝のあ



三つぬばらうたにえらぬ賜の字をさしりあつて

ぬ

正三位顯季

あすや伊豫の海に帆立あけけりつらふにふりて  
すくはのこもこつとるをよめり

和泉或部

あつり昔はたふれつとすらふあの子をいりたり

連懐方の中

後鳥羽院下野

ゆすあふらりつふ子とふさむととと今りかたん

懐舊方の中

右京竹実朝臣

あつりのあつりつふれあつたふれををぬいすつぬあつ

あつりあつりあつりあつりあつりあつりあつりあつり

前大御云方家

あつりのあつりつふれあつたふれををぬいすつぬあつ

藤原仲敏

あつりのあつりつふれあつたふれををぬいすつぬあつ

平長時

あつりのあつりつふれあつたふれををぬいすつぬあつ

入道左大臣

あつりのあつりつふれあつたふれををぬいすつぬあつ

新不知

前大御云基良

あつりのあつりつふれあつたふれををぬいすつぬあつ

右京隆格朝臣



心のかきかいたとあらねだちもいふるにこそよ

藤原光俊朝臣

たらしめぬかきかいたとあらねだちもいふるにこそよ

三首あめゆり述懐と 大御方御歌

そらねたれぬとあらぬの魂あゝとあつつけしをうらす

百首奇 左兵衛督言定

わが望むとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなり

左土将上ゆけの付家百首歌

後系権右前左政大臣

かきかいたとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなり

十首歌中に 前内大臣 是

やまのすのりみらふもいふるにあらぬなりとあらぬなりとあらぬなり

述懐の心を 仲尾幼家

あはれきつとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなり

十五首番言合 保具親朝臣

いそがしきなりの中ららぬなりとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなり

むのらねとすれうれ野中の信のすしと

皇太后文皇太后成女

あはれきつとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなり

あはれきつと 右大臣教雅朝臣

かきかいたとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなりとあらぬなり

又秀経の言とあはれきつとあらぬなり



菅原秀房

袖のついでにありきりしは草かきとて流の如く  
中務にかせられし草子にむくたはゆめをけし  
屋のうきをりしにむくたはゆめをけし

天曆贈皇太后

又此の歌の工かきとて流の如くけり夢をよきとて也

述懐あり

右上天皇

山竹の世のなれしものもよきとて流の如くけり夢をよきとて也  
むすむすありし夢をよきとて流の如くけり夢をよきとて也

従二位家隆

よふせありし夢をよきとて流の如くけり夢をよきとて也

弘長二年百首

入道前右政大臣

かきとて流の如くけり夢をよきとて流の如くけり夢をよきとて也  
すむすむすありし夢をよきとて流の如くけり夢をよきとて也

従三位通氏

すむすむすありし夢をよきとて流の如くけり夢をよきとて也

前大御所基良

かきとて流の如くけり夢をよきとて流の如くけり夢をよきとて也

後醍醐天皇

かきとて流の如くけり夢をよきとて流の如くけり夢をよきとて也

寄病述懐

藤原基俊

日々れは竹のそむくたはゆめをけし



予ふ事かひもたれど愛のこゝろ我身不義のりせし

建長元年和歌本の述懐三百首初

赤中油之定家

世にこそ我のよするにまはるる海をたのじかきとわ

くの公を

土御門院公家

ゆりかたのこもぬくも雲はよしの風を地をさ

百首のち中

順徳院法皇

あまもたのむ地をよすはまをこまぬをのけらありけ

述懐あり

從三位新純

世にこそ我のよするにまはるる海をたのじかきとわ

あはれさきあり 鴨長明

いかに身をたれど世にこそ我のよするにまはるる海をたのじかきとわ

堀河院以時百首并述懐

藤原野仲朝臣

わかれさるる下あけまよふとくぬくもはるる海をたのじかきとわ

歌ふ初

右原基隆

何れも我のよするにまはるる海をたのじかきとわ

源俊定朝臣

すまへとてあはれぬとていふまはるる海をたのじかきとわ

後土御門四上皇

いかに世にこそ我のよするにまはるる海をたのじかきとわ

亨子院法皇











歌不知

用白前左大臣

さきそとせのひさかたてしをいかにたふりてはせあり

百首番あり

赤陽門院越前

おもひをたふさむるをいせおもひをたふさむるをいせ

中務の歌百首

藤原純清朝臣

つぎあはれいそとて多しお侍のそらにたふせんとて

河内守の歌百首

正三位朝臣

世のいそやあらうかたのそらにたふせんとて

建保四年とてまゝの歌百首あり

慈徳大僧正

かきりいそやあらうかたのそらにたふせんとて

新ら歌

後朝の臣

世のいそやあらうかたのそらにたふせんとて

入道前右大臣

あつたつとあせもあつたつとあつたつとあつたつと

あつたつとあせもあつたつとあつたつとあつたつと

正三位朝臣

さきそとせのひさかたてしをいかにたふりてはせあり

東光院の歌百首あり

東三条院

あつたつとあせもあつたつとあつたつとあつたつと

上東院の歌百首あり







平糞時胡占

ねのやほ公ううねのふとと三とや考のふくは

也

高井上人

くもはるるらんれいぬとらふまきわつちりあうら

百首の中

後永橋橋政前公後言

ふめねはらのるふやうらゆんをららぬとて好むま

百首の中

大花江有家

ふれあうふゆゆゆとすくはしゆりうゆ十のゆゆ

終

高司院梅定

あふふはあるるあふふふゆとてふゆとゆゆゆゆ

七脚以後の言

ふれせいのふゆとてふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

右近大將通忠

一すらふふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

夜笠前内大臣

ふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

兼身法師

ふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

女生忠孝

ふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

小野小町

ふゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ



大御言良教

此世をこころいひておぼえつる世にのみたすむるを  
迷懐乃中に  
信懐朝臣家言合々迷懐

祐威法師

此世をこころいひておぼえつる世にのみたすむるを  
迷懐乃中に  
信懐朝臣家言合々迷懐

前大御之伴平

此世をこころいひておぼえつる世にのみたすむるを  
迷懐乃中に  
信懐朝臣家言合々迷懐

老翁者も入道前信及家百首中に

藤原光俊朝臣

此世をこころいひておぼえつる世にのみたすむるを  
迷懐乃中に  
信懐朝臣家言合々迷懐

孫とする家

此世をこころいひておぼえつる世にのみたすむるを  
迷懐乃中に  
信懐朝臣家言合々迷懐



續古今和歌集卷第廿

賀

後朱雀院心まねたひとりの首見新まきゆき

一条院御奇

あゝ葉より初め入しとあやうの字あの子をせとる月を

延喜式年此御風より 躬恒

ちせあつ初とつる昔まはりのをそとるを成小字より

石海初の生をたて 忠慶法師

うゝ初とつる初とつる初とつる初とつる初とつる

建保三年六月和言初の初とつる初とつる

惟大御言忠信

かたの初とつる初とつる初とつる初とつる初とつる

上東門院御風より 花山院御奇

あゝ凡の初とつる初とつる初とつる初とつる初とつる

同院后乃見やとつる初とつる初とつる初とつる初とつる

とつる初とつる初とつる初とつる初とつる初とつる

伊勢乃御

はなとつる初とつる初とつる初とつる初とつる初とつる

以長三年二月和言初の初とつる初とつる初とつる

今上御奇

初とつる初とつる初とつる初とつる初とつる初とつる

中御奇



暫くしてのけるよりとて爰にありとて春はあけ  
ついでなるにいとめでたき物とて言はれり梅は  
ついでなるにいとめでたき物とて言はれり

古上天皇

ひらねのまはしりて言はれりかたはつたつたの  
元二年三月大宮院西園寺に一切の供養せしむ  
幼業のふ東文形しく初登りてついで  
牧歌ありあけり

入道前右大臣

あはれなるにいとめでたき物とて言はれり  
あはれなるにいとめでたき物とて言はれり

前田大臣 ニ時右大臣

あはれなるにいとめでたき物とて言はれり  
あはれなるにいとめでたき物とて言はれり

入道前右大臣

あはれなるにいとめでたき物とて言はれり  
あはれなるにいとめでたき物とて言はれり

源朝臣

あはれなるにいとめでたき物とて言はれり  
あはれなるにいとめでたき物とて言はれり

中法門右大臣



幾とて世をまてすあか池のくぬくともけりたれんか

建長六年三月四日園山に三首を合し梅を

少くはあめさかきつらさくむ乃藤行りては

由書首言林中花 左大臣

く春とちてそ花よりあま風志のりそり雲乃くあ

三月三日廣義云のゆいよそしほさう守家

紀時文

こまかそそあてふ桃乃千あのお花のゆりう君の地えん

奈と持よあひさそて敵勝誨まより筆う付しつげ

さう

後鳥羽院下野

有方其けさるあめつといふ今とてあ本すまをさる

や

入道前右政大臣

けしきみさるさるん若のそあえれそるるく又所つ公る

法成寺入道前右政大臣あそひ心持をそり昔の

君そまらさるあれといひとみさる喜ゆけしは

ろけり

後朱雀院四年

あれあゆすあ花さあられん君子ししをか成はけ

郁芳院根合の言 春宮大吏仰敷

そら乃あさき治乃あやあまらけりてひん君たああ

建保六年八月十三日中夜喜あ池の命とそ事と

糸織雅郎

池水とてりしそんさああの子とあをいすある月影



醍醐入道前左大臣

馬次ゆりともゆけを所を月屋をれをすゆゆ

建保二年九月十三日

前中御之雅具

右のゆりともゆけの月屋をれをすゆゆ

崇徳院の時寶金剛院の御筆ありて萬葉千種

いふては梅せものゆけ

待賢門院坂門

書此のゆりともゆけの月屋をれをすゆゆ

九月十九日

とまきいづりいづりきつるをりゆりともゆけ

書とありゆりともゆけをすゆゆ

うぬゆりともゆけをすゆゆ

後朱雀院

わらわゆりともゆけの年をすゆゆ

右大臣の表をすゆゆ

左大臣の表をすゆゆ

書とありゆりともゆけ

書とありゆりともゆけをすゆゆ

後朱雀院

神風ゆりともゆけをすゆゆ

後朱雀院ゆりともゆけをすゆゆ











あふのうけり川のなをけりてきりてはさうとては

銘不念 前大御言為家

たふりて神といふまゝのちてはけいといは國をなす

中務の執事

十のきけらわりのたねをてきりてはさうとては

日本紀竟宴多治目入彦平持茅天皇

清慎云

たふりて國のなをけりてはさうとては

後朱雀院法時大嘗會の屏風奇

贈糸議義忠

ては月乃かりたふりてはさうとては

義保元年大嘗會天皇方以屏風奇石坂山

前中御之匡房

とては山乃さのちてはさうとては

仁壽二年大嘗會奇 文由卿永範

たふりてはさうとては

建暦二年大嘗會悠紀方屏風奇長等山

前中御之資実

すはたのちてはさうとては

仁治二年大嘗會奇法屏風奇

大鏡の巻長

定なりそちたねをてはさうとては



千五百番奇會

七御門田之旨

百卷の巻乃う包なり山宮の衣衣好いしと鶴の毛衣

塔二位家隆

久々乃あすたか山宮を獲くつ流系月日は

日乃君の奇也



